

# 哲學研究

第百十七號

第十卷  
第十二册

フーアカントの社會學概念に

於ける二三の問題 (三)

五十嵐 信

## 四

### 一 社會の本質

フーアカントは、社會の本質に關して次のやうに論ずる。

社會の本質は、次の二つの事實に存する。(一)その團體の中に於いては、個々人の間に繼續的影響が行はれ、各人は、長い間には、かかる影響をば受けもし與へもする。(二)人間の基礎 (das menschliche Substrat) は、常に、一部分は空間的見地に於いて一部分は交通の可能及び實在によつて、如何やうにか外的にも一の全體に結合して居るところの、個人の多數或ひは團體から成る。従つて、我々は、後に至つて證明せられる事實を

も考への中に入れるならば、社會をば次のやうに定義し得るのである。——社會とは、人間の團體であつて、その個々の成員の間に行はれる内的に基礎づけられて居る相互作用の運載者たるものである (Eine Gesellschaft ist eine Gruppe von Menschen, sofern sie der Träger von innerlich gegründeten Wechselwirkungen zwischen ihren einzelnen Mitgliedern ist.)。

この定義に對して、先づ、事實的内容を有する二つの注釋を加へて置く。(一)一人の個人は、一般に、一の社會にではなく多くの社會に所屬する。(二)ここに云ふ相互作用は、單に諸本能をばそれらの本質的には固定せられて居る形式に於いて働かしめる刺戟を指すものではなく、歴史的發展の意味に於ける進化及び變化を生ずる影響をば指すものである。<sup>1)</sup> 従つて、形式的社會學は、社會の文化形式 (Kulturform) を研究するもので、社會の自然形式 (Naturform) をば度外視する。<sup>2)</sup>

1. フイアーカントは、ここに要約する節の前に、『人間の心意生活の歴史的性質』と題する節を設け、次のやうな趣旨を述べて居る。——人間の心意的性質は、恒常不變なものではなく、個人の心意的組織も團體のそれも、常に歴史的影響によつて規定せられて居る。もし、個人がかかる影響を全く受けなかつたならば、彼は、高等なる動物の段階以上には上らないのである。而して、この歴史的影響が可能であるのは、人間が固定せられて居る本能の外に且つその代りに可塑的素質の一系列を所有するからである。——従つて、狹義に於ける相互作用即ち歴史的相互作用は、可塑的素質の存在と結合して居るのであつて、この意味に於いて、社會即ち傳統を具備する社會は、動物にあつては、それらが既に可塑的素質を獲得して居る限り且つ獲得して居る程度に於いて

存在する、と云ひ得る、と云ふことになるのである。

2 かくて、フイーアカントは、社會的現象をば自然的現象としてではなく文化的現象として見ようとする立場に於いて、彼の社會學體系を樹立しようとして居るものである。而も、彼は、自分でこのことを明白に意識して居らず、且つ、社會的現象を自然的現象と見る立場に於いても社會學體系が成立し得ること及び成立しなければならぬことをば充分に考慮して居ないために、後に指摘するやうな混亂せる社會概念を立てるに至つて居るのである。

なほ、右の社會の定義に對して、若干の説明を附け加へて置く。(a)我々は、右の定義に於いて、社會の上級概念として團體(Gruppe)を用ゐたが、ここに團體と云ふのは、既に仄示して置いたやうに、外的に如何やうにか結合して居る凡ての多數或ひは集團である。この結合は、家族や村落團體に於ける如くに、空間的性質のものでもあり得るし、異なつた土地に別れて居住して居る一種族に於ける如くに、或る規律を以つて行はれる交通に基くものでもあり得る。又、この個人的交通は、精神的交通手段の存在に依つても即ち報知その他の表出手段や物質的財貨の交換によつても代へられ得る。(b)相互作用の概念も、一層詳細に限定せられる必要がある。これは、必ずしも各個の成員が他の各成員と作用を交換する、と云ふことをば意味するものではなく、各個人が受けもし與へもするやうに動作する、と云ふこと、及び諸關係がその團體の中に於ひて全く斷絶することは決してない、と云ふことを、意味するのみである。(c)相互

作用の運載者としては、個人そのもののみならず團體も舉げらるべきである。この眞相を正當に把握するためには、相互作用の内容を考へ且つそれが如何なる力に依存するかを明かにする必要がある。社會の中に於いては、普く個々の個人の間、作用が交換せられる。併し、個人としての個人或ひはかかる個人の總和が、作用するのみならず、また、(而も、主として)、一定の客觀的な力の運載者としての個人が、作用する。かくて、社會の中に於ける相互作用の運載者は、客觀的な或ひは超個人的な力である。而して、かかる力の總體は、周知の如く、團體の中に支配して居る精神 (*Geist*) の、即ち、その團體或ひはその團體に團結する諸個人の以前の體驗及び運命から導き出さるべきものであるが、外的諸影響即ち團結の外的形式空間的環境物質的財貨經濟的社會的及び法律的諸關係等も、等しく重要である。なほ、全く一時的性質を有する團結は、全く客觀性を缺いて居るやうに見えるが、この場合にも、その關與者は、外的及び內的動作の或る方向即ち一致の方向に存する動作をば個人的に選り、各人は、彼の本質の或る方面をば押し退けるのであつて、それだけ、かかる社會にも、或る客觀的な力が成員の上に存在するのである。(e)人間の團結そのものは、直ちには社會と認

められないのであつて、それが一定の論理的關聯に於いて即ち相互作用の行使の關聯に於いて研究の對象となる場合にのみ社會と認められるのである。團體の身體的性質に關する研究や民族の素質に關する研究や歴史の進化に對する自然的環境の影響に關する研究は、單なる社會軀體 (*die bloße Gesellschaftskörper*) に關する問題であつて、百科全書的になるまいとする形式的社會學の範圍には屬しない。(f) 相互作用が內的に基礎づけられて居なければならぬ或ひは心意的種類のものでなければならぬ、と云ふのは、例へば、*Beutehiet* と *Raubtier* との間に行はれる狩獵に於いて又或る事情の下にあつては戰鬪して居る人間に於いて起る相互作用が、常に、身體的影響或ひはその可能の中に存立して居り、且つ、客觀的及び主觀的にそれに依存して居るに反して、社會的相互作用は、その本質に於いては、外的影響の可能に依存せず、それ自身の中に基いて居ることを意味するのである。例へば、畏敬や契約や騎士的規律に従つて行はれる鬪爭等に於いては、特殊な心意的關係即ち關與者の或る內的結合がその根柢に存在する。尤も、社會の中には、社會外的相互作用 (*aussergesellschaftliche Wechselwirkungen*) も起り得るのであつて、例へば、現代の經濟的生活に於いては、そのことが特に著しい。<sup>1)</sup>

1 フォーアカントは、この次に、以下に要約するやうな三つの註釋を加へて居る。——(一)我々は、ここに、社會學(ここに解せられて居る如き)の頗る重要な特質、或る意味に於いてそれに附着する本質的缺陷、而も同時に凡ての科學が有する缺陷に、觸れる。即ち、實際の人間の共同生活を社會的過程と社會外的過程とに分離し一の科學をその一方の部類のみに制限することは、生活の關聯を中斷することであるが故に不自然である、と云ふ非難が、起り得るのである。併し、例へば、心理學に於いても、その對象たる心意生活殊に意識過程の總體は、一の大なる全體一の大なる總體事象即ち人間と云ふ心理的物理的統一體及びその生活過程の一部分一片を成して居るに過ぎない。社會學が百科全書的歴史哲學的になるまいとする場合には、この他に途が無いのである。(二)右の社會の定義の中の内的結合に對する指示は、新しいものである。從來の定義は、一般に相互作用を擧げるのみで満足して居た。我々のこの附加は、現象學的徹底的分析によつて初めて可能となつたのである。我々が社會の形式と稱する人間の關係が悉くゲマインシャフトではなく、この形式の外にかの内的結合を缺く契約關係や鬭爭關係も存する、と云ふ異議が、起るかも知れないが、ゲマインシャフトの状態が各關係に於ても缺けることは無い、と云ふことは、形式的社會學の『ガリライ的』發見の一なのである。(三)形式的社會學の中に純正社會學と應用社會學との區別があることは、この學の今日の狀態に就つては、殊に重んぜられ明かにせらるべきである。後者は、例へば、マックス・ウェーバーや、フォン・ウイーゼによつて代表せられる方針であり、前者は、シンメルや私によつて代表せられるそれである。前者は、哲學的心理學的準備を必要とし、後者は、對象に従つて、法學的土俗學的歴史的經濟學的等の準備を必要とする。應用的方針は、他の科學や生活の欲求に遂かにより多く適合するが、それ自身からは基本概念的の充分なる開明に到達し得ない。

社會の定義から、その同一性 (Identität) の問題に轉ずる。或る社會がこれだけの期間に互つて同一の社會と認めらるべきか、而して、何時他の新しい社會がこれに代るか、は、純然たる外部的特徴即ちその中の諸個人の同様或ひは差異によつては決定せ

られず——かかる方法を取ることは、我々の定義の意味に矛盾する——行はれる相互作用及び影響がその全様式から見て存続して居ると解せられるか、或は、本質に於いて全く變化して居ると解せられるかに依存する。即ち、それは、相互作用の内容に關係するのである。一の社會は、その中に於いて支配して居る精神が本質的に同様に持續して居る間は、存続して居りそれ自身に於いて同一である、と解せられねばならない。日常生活の用語法も、これと一致する。我々は、例へば、その文化及び様式が變化せずに維持せられるならば、その成員が絶えず變化して居るにも拘らず、同一の民族と云ふのである。譬へて云へば、社會は河である。水粒は流れ來つて流れ去るが、その河は持續する。何となれば、その河の特性は、その個々の要素には存せずその形成關係及び運動關係 (Gestaltungs- und Bewegungsverhältnisse) に存するからである。同様に、一の社會の特性は、個人としての個人即ち嚴密に云へば個人が社會によつて加工せられない前に成す素材には存し得ず、それは、社會によつて形成せられた歴史的個人に依存する。併し、この形成 (Gestaltung) は、また、社會の中に支配して居る精神によつて、而も、後者が自身を維持するやうに、規定せられるのである。

終りに、我々の定義及びそれに附け加へて展開せられた思想を回顧すれば、凡ては、

我々が社會の本質に關して神祕主義にも皮相な合理主義にも囚れない正當な觀念を獲得することに係つて居るのである。更に、社會と有機體とを比較することによつて、このことの真相をば一層詳細に検討して見よう。有機體がその個々の要素に分解せられるならば、これら凡ての要素は、それらが全體との關聯に於いて所有して居る屬性と力とを失ふ。かくて、決定的なるものは、その要素としての要素には存せず、その構造に存する。即ち、特異の構成によつて、それにより創造せられる諸關係 (Verhältnisse und Beziehungen) によつて、各有機體及び其各種にとつて個別の特質的なる或る作用及び作用可能性が生起する。換言すれば、ここに、有機體が絶えず取り代へるところの個々の要素の去來に係りなく、或る力の或る恒常性が存立するのである。このことと密接に結合して居るのは、全體とその部分との特殊な關係である。即ち、一の全體としての有機體は——それに於いては、孤立せる部分が所有しない全く新しい屬性と力とが生起する、と云ふ意味に於いて——その部分の總和よりも大なのである。これら凡ての關係に於いて、社會は有機體に一致する、故に、我々は、社會が特異の獨立の構成物として個々の人間に對立する、と斷言すべき權利と論理的義務とを有するのである。<sup>1)</sup>尤も、これは、社會が特殊な實體 (Substanz) である、と云ふことを



意味するものではない。社會は、云ふまでもなく、空間的或ひは實體的意味に於いて個々の人間の外に (ausserhalb) 或ひは彼らの間に (zwischen) 存在するものではない。社會の凡ての力と作用とは、その『坐』(Sitz) をば、その運載者として作用する個人の中に於いて持つのである。而も、我々は、社會をば、統一的なる作用力ある構成物としてこれらの個人から細心に區別しなければならぬ。個人の去來によつて影響を蒙らない特殊な力が、その諸要素が相互に對して成す諸關係から成長するのである<sup>2)</sup>。確かに、これら凡ての力と過程との運載者は個々の人間であるが、併し、特殊な個別存在としての彼らの性質に於いてではなく(さうであつたならば、社會は個人の去來に依存せざるを得なくなるであらう)、各社會にとつて特質的であるところの團結の特殊な形式に於いてである。我々の概念構成は、この形式及びこれと不可離的に結合して居る特殊な力に關係する。それは、抽象の過程に基く。併し、この抽象 (Abstraktion) は、假構 (Fiktion) の性質をば有せず、普く現實に與へられて居るものの分離 (Isolation) に基く。而して、この分離は、我々の認識活動の目的によつて要求せられるものである。併し、かく云へばとて、この團結が何ら物的基礎 (physisches Substrat) を持たず一般に物的に把握せられ得ない、と云ふのではない。個人としての人間のみが

かる現實性を有する、と考へるのは、正當でなく、團體も、個人と等しく把捉せられるのである。個人に於いても、單にその身體のみが考へられて居るのではなく、彼の人格も等しく考へられて居る。即ち、結局、心理的、物理的、統一體が考へられて居るのである。同様に、團體も、一方に於いてはその特殊な力を有し、他方に於いてはその運載者を有する、心理的、物理的、構成物なのである。我々は、既に、前に、充分なる根據を以つて社會軀體 (Gesellschaftskörper) と云ふ語を用ゐ、社會の中に存在する個人の總體がその社會的關係を考慮せずに解せられる場合を意味させた。一の社會の中に於ける個々の人間は、その各々がそれ自身に於いて或る人格並びに統一體を成すのみならず、それと同時に、社會の本質がそれに於いて現れるところの相互作用の活動と力の全體とに對して、實體的支持點を成すのである。

1 フーアカントは、S. 41. には、「個人 (Individuum) を云ふ語は、『歴々』自然」人 (der „Natürliche“ Mensch) をも「歴史」人 (der „historische“ Mensch) をも意味するが、全體が部分の總和よりも大である、と云ふ命題は、社會に對して適用せられる場合には、孤立せる「自然」人 (經驗の中に於いては實際には何處にも存在せぬところの) の一列が一社會的事實的に存立して居る關係に對置せられる、と云ふ意味に於いての、解せらるべきである。』と云つて居る。

2 フーアカントは、(111) に例を擧げて、「常識の思考も、今日に於いては、環界の影響 (Einfluss der Umwelt)・環境の力 (Macht der Umstände)・事實の論理 (Logik der Tatsachen)・物體的關係の強制 (Zwang der sachlichen Vorfindnisse) の存在を熟知して居る。如何なる歴史家或ひは文學史家も、今日に於いては、最早、政治的行動或ひは藝術的作品をば、行動する人間の個人性の

外に諸關係全部殊にその時の政治的傾向或ひはスタイルの傾向を考慮することなしに説明しようとはしないであらう。』と云つて居る。而して、ここに要約した節の次に、特に、『環界の力』と題する節を設け、科學的思考法は、人間に關する事物を全然個人の生具的素質から説明しようとする通俗的傾向に反して、それを第一には諸關係の力及び習得的屬性に歸して理解しなければならぬ、と云ふことを力説して居る。

3. フィーアカントは、ここに註釋を附け加へて、『換言すれば、我々は、社會的事象の場處 (Orte) としての個人 (Individuum) をその内容を構成する諸體系 (Systeme) を區別し得る。各個人は、その相對的統一性に拘らず、我々がここに體系と稱するところの種々なる態度や意嚮や目的追求等 (例へば、一定の教會の意嚮の如く) の多數を運載する者である。而して、遂に、多くの體系は、個人の多數によつて宥されて居る。素樸な考察法は、偏局的に「歴史的」である。即ち、それは、場處即ち個々の人間のみを見て居る。科學的考察法は、それと同時に或ひは何よりも先に「體系的」でなければならぬ。即ち、それは、體系に注目しなければならぬのである。』と云つて居る。

## 二 社會學的思考の基本範疇としての關係 (Beziehung)

フィーアカントは、社會はその要素が互ひに特質的關係を成して居る一全體であるが故に、従つて、社會の本質を正當に理解するためには、一方に於いてはかかる全體の本質を他方に於いてはその關係の事實と範圍とを正當に評價することが肝要である、と考へ、先づ、第二の點に就いてここに次のやうに述べ、第一の點に就いては次節に於いて述べて居る。

關係の事實が社會學に對して有する意義は、對象の範疇 (Kategorie des Gegenstands) を

前景に置く通俗の思考の習慣から離れる時に、初めて正當に理解せられる。かかる通俗の思考にとつては、人間の社會も、固定せる生具的屬性を具有する獨立し單に外的のみ結合せる諸個人の總和から成る。太古から今日に至るまで、素朴な思考法は、かかる個別存在の姿をとつてその思考の中に於いて存立する事物をば主要運載者(Hauptträger)として歴史的實在の構想及び理解(die Konstruktion und das Verständnis der geschichtlichen Wirklichkeit)に使用することを超越して居ないのである。併し科學的思考法は、人間に關する事物のかかる素朴な對象的解釋と絶縁しなければならぬ。これにとつては、人間がその中に置かれるところの關聯が、第一に重要となる。この關聯が彼の動作を第一に規定するのである。實際に於いて、社會學は、諸關係の力(die Macht der Verhältnisse)、個人を形成するその能力(ihre Fähigkeit, die Einzelnen zu gestalten)を取扱はなければならぬ。それと共に、關係の範疇(Kategorie der Beziehung)が、思考の中心を占めるのである。<sup>1)</sup>社會の本質の理解を妨げる障礙及び困難は、靜止せる孤立せる構成物としての人間と彼らの間に往來する從つて個人としての個人から相對的に獨立する力を區別し得ないことに基く。歴史的社會的實在の理解を困難ならしめて居る二つの主なる暗礁、即ち、社會や、國家や總體意識や言語や法律が全く獨立的な

神祕的な存在を構成すると考へる神話的實體論的解釋の *Synia* を個々の人間及び過程のみを見てそれらの統一性及びそれらの關聯恒常的影響及び社會的結合の單なる形式の中に存立する力を看過する名目論的虛無主義の *Charvatis* との間を巧みに通過せしめるのは關係的思考の完成のみである。

1. フイーアカントは、上の自然人と歴史人との兩概念も、これらの構成に對しては環界に對する個人の關係が標準となつて居るが故に、關係概念 (*Relationsbegriffe*) の部類に屬する、と云ふ。又、被創造者即ち社會によつて影響せられる者としての人間及び創造者即ち環境に對して影響する者としての人間・生産する人間及び消費する人間・行動者及び監視者 (*Hankende und Zehende*) も、關係概念であつて、凡てこれらの場合に於いては、同一の人間が反對の機能と云ふ見地から考察せられるものに外ならないが、社會學的考察にとつては、これらの機能はそれらに照應する概念構成の要求を斥け得ぬほどに重要であり、而して、機能は對象的思考によつてではなく關係的思考によつて把握せられる、と云ふ。なほ、生活或ひは生命 (*Leben*) の概念も、今日の我々にまつては、單に、存在すること及びその内的素質及び力に従つてその日を過すことのみを意味せず、適應の不斷の連鎖・我々に現れる要求に對する不斷の態度決定・環境との不斷の交通を意味するが故に、關係概念となつて居る、と云ふ。

特に、關係的思考法は、我々の領域に於いては、人格 (*Persönlichkeit*) の概念の變更及びその意義の異つた解釋を必要ならしめる。素樸な思考法は、個々の人間をば詳細に限定せられぬが而も思考法及び動作に於ける高度の完結性及び統一性 (*Geschlossenheit und Einheitlichkeit*) を意味するところの一の内的統一體となし、更に、この固定的統一たる人格に於いて社會的歴史的生活の觀察に對する單位を認める。併し、社會

學的思考法は、この兩つの前提を絶縁しなければならぬ。先づ、通俗の思考法は、人格の統一性をば過當に評價して居る。事實、我々は、我々に於いて、同一の人間が異つた關聯の中に於いて全く正反對の屬性を展開することを、日常見て居る。異つた關係は、云はば、異つた人格をつくるのである。<sup>1)</sup>通俗の思考法は、これを矛盾と考へるが、本來の意味に於ける矛盾は、一般に、思想の領域にのみ屬し事實の領域には屬しない。矛盾の概念は、第二次的な意味に於いてのみ、即ち、人間から一定の度合の統一性及び完結性を要求しその缺乏をば反規範的或ひは更に病的と解釋する價值判斷の意味に於いてのみ、かかる場合に認められるのである。

1. フイアアカントは、人格の環境に對する依存は、既に、純形體的構成物に於いて始まるので、人間は、制服を着る場合には平服を着る場合とは異つた自我意識 (Ichbewusstsein) を持つ、と云ふ。

故に、社會的歴史的事實は、考察の單位として個人 (Person) をではなく緒關係 (Verhältnis) を根柢に置く場合にのみ、完全に理解せられる。一定の關係は、一定の動作法 (Verhaltensweise) と云ふ意味に於て、たとひ全然ではないにせよ比較的個人に依存しない一定の作用を惹起する。かくて、我々は、凡ての場合に於いて、關係が人間よりも力強いこと、一定の影響及び一定の動作へ向ふ或る傾向が關係から成長し、それは人間

自身がその個人的屬性によつて他の動作を希ひその關係の支配圈の外に出でようと努力しても自らを遂行することを、見るのである。

### 三 全體思想 (Totalitätsgedanke)

フイーアカントは、次に、人間の歴史及び文化に關する凡ての研究は社會をばその全體に於いて所與として前提しなければならぬことを説明して、次のやうに云ふ。<sup>1)</sup>

1 次に要約するフイーアカントの所説が、彼が社會學に於て分析的研究の重要なことを説いた箇處の『天體力學に於ても、ガリライヤケプラーやニュートンが出づるまでは、自然の定質的考察法云々は全體から研究する方法が一般に行はれて居たが、彼らがそれに代へるに定量的確定及び數量的分析の方法を以つてしたこゝによつて、全く新しい見地及び新しい問題提出法が獲られた。全體考察 (Totalitätsbetrachtung) は、或る意味に於いては、物の表面に於いて止り、單に平面像を與へるのみであつて、ただ分析のみが、都合よき場合に、それまで豫想せられなかつた深みにまで達し、それによつて全く新しい解釋を獲ることが出来るのである。この二つの異つた研究法に、大體に於いて、右に區別した社會學の兩方針 (歴史哲學的百科全書の方針と分析的形式的方針とを指す) が照應する。即ち、第二の方針のみが、徹底的分析の方法を用ゐるのである。尤も、これにあつても、天體力學にあつてと同じく、單なる分析のみが行はれるのではないことは、勿論である。何れにせよ、形式的社會學と云ふ若い學科は、既に、かかる方法によつて、四つ又は六つの「ガリライ的」發見を成就し以つて我々の認識を豊かにしたこゝを誇り得るのである。と云ふ言葉に對して、如何に關聯するか。この點に關する彼の所説は、甚だ曖昧であるやうに思はれる。

人間の社會は、常に、有機的構成物 (das organische Gebilde) の意味での一の全體を構成

して居る。有機的構成物は、周知の如くに、その部分(Teile)からも、況して、その要素(Elemente)からも生起(entstehen)するものではなく、また、これら兩者から合成(zusammensetzen)せられるものでもない。それは、生殖(Reproduktion)の方途によつて自らを維持するものであつて、有機的なるものの最初の生起は、我々にとつては、思考の中に存するのみである。このことは、人間の社會にあつても同様で、我々は、言葉の完全な意味に於ける社會が生起するのを、即ち、全く孤立せる非結社的存在の状態から發生するのを、何處にも見ることが無い。變化するのは、常に、個々の社會の内容及び範圍のみである。而して、新しい社會新しい家族新しい組合、否、新しい種族及び國家でさへも、生起する場合には、常に、それらは、既にそれまで他の社會に屬して居たか或ひはなほ屬して居る諸個人の聯合から發生するのである。即ち、既に存在して居る社會的統一體が他の要素を自らの中に攝取するか(例へば、征服者が新しい國家を構成する如くに)、又は、一のより大なる社會的全體の中により小なる諸結合が生起するか、之ら二つの中の何れかである。<sup>1)</sup>かくて、eine Gesellschaft は、<sup>1)</sup>ここに生起するが、die Gesellschaft は、いづこにも生起しない。即ち、『自然』人が結合して社會を生ずると云ふことは、いづこにも無いのである。法(Recht)をば後に至つて法の性質を有する力(Macht)から



發生するものと見る見解も、このことの誤解に基く。

1. フィーアカントが親和或ひは結合の關係のみを重視して反對或ひは分離の關係を無視して居ることは、ここに、一の社會が二或ひはそれ以上の社會に分裂する場合を擧げて居ないことによつても注意せられる。

人間社會をば內的に結合して居ない人間の總和として解釋することは、それ自身に於いては、矛盾を含まないかも知れない。併し、實際に於いては、社會は、日常生活の思考法に於ける他の多くの場合と同様に、この場合にも、社會的人間の總和として解釋せられて居る。即ち、人々は、常に關係及び內的關聯をば諸個人の間に恣意的に前提しながら、而も、その社會をばかかる存在物の單なる聚合として説明し取扱はうとして居るのである。かくて、內的結合は、初め、孤立的存在物に分解せられ、次いで、それから再び合成せられて居ると云ふことになるのである。また、社會が諸個人の相互作用によつて生起する(entstehen)或ひはかかる相互作用の上に自らを建設する(sich aufbauen)と云ふのも、謬つた云ひ表し方である。相互作用の概念は、既に、社會の概念を前提して居る。かくて、正當なのは、社會はその成員の相互作用に於いて自らを立證する(sich beifügen)と云ふ表し方のみである。

かくて、社會は、少くとも、人間とその古さを等しくする。その生起を問ふは無意味

であり、その形式の變化が述べられ得るのみである。同じ事は、社會の本質と不可離的に結合して居る或る文化財(慣習、言語體制等)に就いても認められる。これら文化財を考へる場合には、内容と形式とを區別すべきであつて、内容は、歴史的な生活に於いて絶えず變化して來て居るが、形式そのものは、最初から與へられて居るとして前提せられなければならない。<sup>1)</sup> 社會の存立と共に、他方に於いて、凡てこれらの文化財そのものが直接にその最も單純な形式に於いて與へられて居る、と想定せらるべきである。何となれば、それらは、人間の素質及び相互作用の機構から直接に結果するからである。

1. *フイアアカント*は、ここに、例を擧げて次のやうに説明して居る。——言語の始源を問はうとすれば、社會的存在物の表出活動を指示せられるであらうが、これは、また、理解の行爲を自身の中に包含するが故に、社會の *Praktische* に制限せられることになる。同じく、各 *Sitte* 及び全 *Sittlichkeit* の派生は、規範の内的承認の實行及び意欲を従つて道德的動作の本質を前提して居るのであつて、恐怖や合目的性やかかる實際的衝動の忘却は、誘因或ひは支持として問題となり得るのみである。

上述の事實が屢々誤解せられることは、體驗と反省との間に於ける周知の不調和 (*das bekannte Misverhältnis zwischen Erleben und Reflexion*) に基く。反省は、常に、體驗の全體性をば、我々の言語に固有なる論議的性質 (*die diskursive Natur*) によつて截斷する。我々の知能活動は、個々の成分を偏局的に重視することによつて統一的な生活を毀損す

る。人間に關する事物の説明に於いて、それは、特に、かかる動機を棄て得ず、この部分を全體と混同するのである。併し、認識に於いて最初のもは、實在に於いて最後のものである。

社會と共に、また、その中に於ける平衡の状態 (der Zustand des Gleichgewichts) が與へられる。孤立せる動物に於いて、既に、諸本能は、その動物と環境との間に一の平衡を存せしめるやうにつくられて居る。同様に、群生的動物に於いては、社會的諸本能が團體の中に平衡を維持する。而して、人間に於いても、可塑的素質が、社會の中に一の平衡状態を存せしめるほごに發達して居なければならぬ。この平衡は、個々のそれぞれの事實の説明に於いて常に前提せらるべきものである。

## 五

社會學上に於ける私たちの立場は、社會學の方針に關するフイーアカントの所説を考察して居る間に、彼の立場との間にかんりの距離を隔ててしまつて居る。かくて、社會の本質に關する彼の所説を要約し終つて、ここに彼の社會學概念に存する諸問題を一層明白ならしめる目的を以つて彼の社會概念を吟味しようとするに當り、

私たちは、彼の論述の全般に對して單なる消極的批評を加へることが益々意味少いものであることを意識するのである。故に、私たちは、以下に於いては、社會學上に於ける私たちの立場と彼のそれとの相異に關係を有し従つて私たちが自らの將來の研究の出發點を決定するに當り反省を要求せられる限りに於いて、彼の社會概念の核心を成す諸思想を檢討しようとする。

フイアカントが前項に要約せられたやうな社會概念を樹立するに至つた動機は、彼自身が緒論の「社會學に於ける個々の諸方針」と題する節に述べて居ることによつて知られる如く、社會をば單一なる不可分的全體と見る見解と社會をばその成員の單なる總和と見る見解とを調和しようとする努力に存する。併し、中世のスコラ哲學に於ける實在論と名目論との對立を想起せしめるどころのこれら二つの社會觀を調和しようとする努力は、ひとりフイアカントに於いてのみ見出されるものではなく、現代に於ける殆ど凡ての社會學者に於いて認められるものである<sup>1)</sup>。而して、フイアカントは、彼がジンメル<sup>2)</sup>の指示に導かれて立てた *Beziehung* を社會學の基本範疇とする思想と彼がウォルフ<sup>3)</sup>、ガング<sup>4)</sup>、コエーラー<sup>5)</sup>やウェルトハイマー<sup>6)</sup>やウイリアム<sup>7)</sup>・

シュテルンやシュブランガーやトロエルチ等によつて後援せられて居ると考へる所謂 Totalitätsgedanke を結合して、社會をば分肢を有する全體人間の團體であつてその個々の成員の間に行はれる相互作用の運載者たるものと見る。併し、社會に關する實在論的見解と名目論的見解とを調和しようとする彼の努力は、未だ、私たちが満足せしめるまでには至つて居ない。ここに豫め私たちの所見を一言にして述べて置くならば、フーアカントの社會概念は、社會に關する右の兩見解を調和しようとする努力から産まれて居るものではあらうが實際の結果に於いては、實在論的社會觀そのものに少しく名目論的社會觀を加味して居るに過ぎず、これら兩社會觀をば一層高次の見地に立つて綜合して居るものではない、と云ふことに歸するのである。

1 社會と個人との關係の問題（これと密接に關聯して居る、社會意識と個人意識との關係の問題）は、社會學上の凡ての問題の根柢に横つて居るものであるが、民族心理學史の研究によつて知られて居るスガランチニは、これに關して次のやうに述べて居る。

「この問題（スガランチニは、ここでは、所謂集團心理現象の本質の問題を指して居る）は、實は、常に新しく至る處に現れる永遠的な實在性問題（Realitätsfrage）（而して、これは、新しい姿をとつて絶えず繰返して現れるところの、我らの思维の様成物と感性的實在性との間の争ひの結果であるが）の、一の特種な場合に過ぎない。何が *Real* であるか？個人が社會か？それとも兩者ともにか？と云ふ歴史學・社會學・民族心理學に於いて常に反復して現れる問題に於いて、根本的に云へば、普遍論争（Universalienstreit）が、なほ生き永らへて居るのであつて、この論争は、決して中世哲學の單なる一挿話ではなく、一の永遠的な問題が當時に於いて興へられた形式に外ならないのである。個別化せられない集團的事象である一切の過程に對して、我らの思维は、そ

れが自然的過程(或ひは事象一般)の總體に對して世界の實體と云ふ主體を立てるやうに迫られると同様に、内的必要に迫られて、民族・社會・民族心・社會心・群集心等と云ふ普遍主體 (Allgemeinsubjekte) をば創造する。併し、ただ個人のみが、時間的空間的に規定せられる存在を有するのであつて、ただ個人のみから、具體的に證明せられる作用は出づるのである。——の科學の發達の初期に於いては、かかる想像力の所産・純然たる *nomena* をば實在として研究對象にしてしまふ傾向が、存する。その成熟期に於いては、懷疑・批判及び一層精密なる事實の觀察が、それを再び排除するか、或ひは、それに對して純然たる思惟標成物・抽象的なる普遍概念としてそれに屬する地位のみを賦與するやうになる。——このことに、なほ、他の因縁が附け加はる。もし、認識の新領域が開かれるか、或ひは、事實が全く異つた見地から觀察せられる時には、それらば、聯想の作用の結果として、他の既に知られて居るそれと最も多く親縁及び類比を示すものに、同化せられる。かくて、民族生活の共通的内容たる言語・神話・法律等は、その本質に於いても並びにその事實的生起に於いても精神的性質のものとして現れ、又、それ故に、最初は、疑ひもなく科學的意味に於いてさへも心理的性質のものとせられるのである。而して、心理的事實は一の如何やうにか性質づけられた心を前提するが故に、民族心・社會心・全體意識等の實體或ひは普遍概念がつくられた。併し、心理的事實をば進化せる個人意識の内容として見る一層嚴密な新しい見解は、今や、これらの概念をば再び驅逐し、而して單に具體的に證明せられる事實の上に立たうとして居る。——ニースガッチニは、次いで、かかる新見解を代表するものとして、*Simmel, Über das Wesen der Sozialpsychologie* (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 26, S. 285 ff.) 及び *Bruner, Zur Theorie der kollektiv-psychischen Erscheinungen* (Zeitschrift für Philosophie und philosophischen Kritik, Bd. 141, 142 ff.) を擧げ、その要旨を紹介して居る (*Spanzini, Die Fortschritte der Volkspsychologie von Lazarus bis Wundt, 1913, S. 232—242*)。實際に於いて、彼が擧げて居るこの兩論文は、右の問題に關して徹底せる理解を獲ようとするに當つては看過せられ得ないものである。

フイーアカントによれば、社會は、その諸要素が互ひに特質的關係を成して居る一全體であるが故に、社會の本質を理解するためには、一方に於いては、かかる全體の本

質を、他方に於いては、その關係の事實と範圍とを、正當に評價しなければならぬ。而して、彼は、社會をば、人間の團體であつてその個々の成員の間に行はれる内的に基礎づけられて居る相互作用の運載者たるものと定義するのである。なほ、彼の説明するところによれば、人間の社會は、その部分からでも決してその要素からも生起することなく又この兩者から合成せられることもなく生殖の方途によつて自身を維持するところの、有機的構成物の意味での一全體であり、この全體が運載する一定の關係は、一定の動作方式と云ふ意味に於いて、たとひ全然ではないにせよ比較的個人に依存しない一定の作用を惹起する、と云ふことになる。かくて、私たちは、フイーアカントによつて社會と云ふ全體に於ける諸要素が互ひに成すところの特質的關係と認められて居るものが、確かに特異の性質を附與せられて居ることを見出す。(尤も、これは、根本的に考へれば、彼のみに限られたことではなく、常識の社會觀念並びに多くの社會學者の社會概念に於いて見出されることであるが。) 即ち、彼によれば、社會と云ふ一全體に結合して居る諸個人の間には、所謂内的に基礎づけられて居る相互作用が行はれるが、この相互作用は、諸個人によつて運載せられるやうに見えても、個人としての個人からは相對的に獨立して居り、實は、社會によつて運載せられるも

のなのである、と云ふのである。

彼は、かかる社會概念を樹立するために、夙に、社會學的思考の基本範疇として關係 (Beziehung) を擧げて居る。<sup>1)</sup> 併し、この關係の範疇に關する彼の所論は、常に通俗の思考法、素朴な思考法を唯一の論敵として居る彼の他の多くの所論と同様に、常識の思考の矛盾を除去しその錯雜を組織だてることによつて學的認識に到達しようとする私たちにとつては、甚しく理解に苦む思想を含むのである。孤獨で居る場合と群集の中にある場合とに於いてその人間の行動が甚しく——質的に——相異なることは嘗つて、個人心の外に群集心の存在を信せしめ個人心理學の外に群集心理學を樹立せしめるに與つて重要な一動因であつたが、人間が環境が變り刺戟が異なることによつて別な反應を行ふことに、何の不思議もなかるべきである。私たちは、フイアーカントが、かの群集心の實在を主張する見解に似て、人間の動作は彼がその中に置かれるところの關聯によつて規定せられる、と云ふ事實から出發して、一定の關係は一定の動作方式と云ふ意味に於いて比較的個人に依存しない一定の作用を惹起する、かくて、關係は凡ての場合に於いて人間よりも力づよい、關係からは一定の影響及び一定の動作へ向ふ或る傾向が成長しそれは人間自身がその個人的屬性によ



つて他の動作を希ひその關係の支配圏の外に出でようと努力しても自身を遂行する、と考へるに至り、かくて、人間と人間とが相互に成す關係をば彼ら自身とは別に彼らの間に存立する一種の實體の如くに説いて居ることを、理解し得ないのである。<sup>3)</sup>

1 Vierkanth, Die Beziehung als Grundkategorie des soziologischen Denkens, Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie, Bd. IX, Heft 1 und 2. 而して、フォン・ウイーゼは、彼の指示に導かれて、社會學をば *Lehre von den Beziehungen und Beziehungen der Menschen* として組織するに至つて居る。併し、彼の關係とフォン・ウイーゼの關係とが別異のものであつたことは、彼の *Gesellschaftslehre* とフォン・ウイーゼの *Allgemeine Soziologie* の公刊によつて明白となつた。この點に就いては、改めてフォン・ウイーゼの社會學概念を考察し得る機會に詳論したい、と思つて居るから、ここでは觸れないで置く。

2 シンメルは、先に擧げられた論文の中に、個人心の外に又は上に社會心或ひは集團心を認めることは誤謬である、とし、かかる誤謬は、(一)言語や國家や法律や宗教や慣習や普通の精神形式等が、統一體として考へられる以上は、『妥當』する觀念的内容であつて、一般に何らの起源をも持たぬに拘らず、その創造者及び運載者たる心理的主體を持たねばならぬと考へられること、(二)集團の直接的感覺的行動が、個人の行動を吸収し特殊な個人の個別的行動に分析せられ難き現象を形成する場合に、結果たる現象の *Einheitlichkeit* が、前提せられたその心理的原因の *Einheit* に反射すること、(三)群集の中に存する個人の感情・行動・表象が孤立せる個人に於いて起る心理的過程と質的に差異する、と考へられる結果として、他人によつて影響せられて居る個人の行動と然せられて居ないそれとの差異は凡て他の氣分や行動の爲方の差異と同様に全く個人心の中に起るところのものであり、この對立の一方をば一の新しい超個人的な心理的統一體に據ゑることを決して強ひない、と云ふことが、氣づかれないこと、これら三事實に起因して居る、と説いて居る。

3 マクイザアーは、社會を有機體として或ひは心意又は精神として或ひは『その諸部分の總和よりも大なる』ものとして見る從來のフイーアカントの社會概念に於ける二三の問題

の社會觀——これらが何れもフイアカントの社會概念の構成要素となつて居ることは、前項の要約に於いて容易に看取せられるであらう——が凡て諸個人との關係をば實體化する謬想に基いて居るものを、評論して居る (Alicover, Community, 1917, pp. 69—97)。

ジンメルが定義のための論争を能ふ限り斥ける最も廣い社會の觀念から出發し、ようとして、最廣義に於ける社會は數多の個人が相互作用に入るところに存在する、と定義したことは、私たちが既に知るところである。併し、極端に云ふならば、一塵一芥と云へども、それがこの世界に存在することによつて他の森羅萬象に何らかの作用を及さぬは無く、又、他の森羅萬象の存在することによつて何らかの作用を蒙らぬは無い。従つて、地球上に棲息する何れの個人も、他の凡ての個人との間に何らかの相互作用を營みつつあるわけである。併し、社會學は、云ふまでもなく、人間と人間との間に行はれる凡ての相互作用を把握しようとして企てるものではなく、特に社會的な相互作用のみにその注意を制限するものである。而して、萬般の相互作用から特に社會的なるそれを選択しようとするに當つては、換言すれば、社會的現象の本質を抽出しようとするに當つては、種々なる見地があり得るであらうが、私たちが、先に假に、社會的現象をば自然的現象として見る場合にはその本質は心意的相互作用即ち意識を有するところの諸個人が意識を有するが故に相互に行ふ作用であり、社會的

現象をば文化的現象として見る場合にはその本質は文化的相互作用即ち諸個人が意味を具へた或ひは價値に結びつけられた意識を有するが故に行ふ相互作用である、として置いた。かくて、私たちに於いては、社會學は、社會の學ではなく、社會的相互作用の學或ひは社會的現象の學なのである。かかる私たちにとつては、社會は、社會的相互作用を營みつつある諸個人が一定の見地<sup>1)</sup>から見て一の團體を成す關係にあると認められるものと云ふことになるのである。勿論、社會に於いて、その成員たる諸個人の單なる總和のみを見るのは、誤謬である。何となれば、社會は、一定の關係に於いて立つ即ち一定の相互作用を行ひつつある諸個人の團體だからである。而も、一定の關係に於いて立つ諸個人の外に又は上に、別に、社會はあり得ない。而して、かかる社會の完全なる認識を獲るために、社會の具體的概念即ち一定の關係に於いて立つ諸個人の團體と社會の抽象的概念或ひは社會の本質即ち諸個人の團體として社會たらしめる一定の關係とを區別して考へることは、可能であり、必要でもある。私たちは、その點を問題にしようとするものではない。ただ、一定の見地から見つつある意識によつて云はば論理的に構成せられる關係をば物理的乃至心理的存在の如くに考へ、諸個人の外に又はその上に社會の實在を考へるところに、フイーア

カントの社會概念が私たちのそれから決定的に差異する點が存すると私たちは思ふのである。

1 人間の團體をば土石の堆積や生物の群體から區別して社會たる關係に於いて立つ一體と認めしめる條件としては、同一の地域に生活することとか、共通の意識内容を有することとか、共同の意欲或ひは目的を有することとか、種々擧げられるであらうが、今、私たちは、この問題を論究する餘裕を持たない。何れにせよ、この條件は、認識の目的の相異によつて相異すべきものである。

なほ、社會をして社會たらしめる一定の關係をば一種の實體の如くに考へるフィアカントの思想は、彼が人間と人間との間に認められる關係に於いて或ひは人間と人間との間に行はれる相互作用に於いて結合的親和的なるもののみを社會的關係と認め、分離的反對的なるものをばそれがその背景に結合的親和的なるものを伴はぬ限り社會外的關係として恣意的に社會學の研究領域の外に棄て去つて居ること、密接に關聯する<sup>1)</sup>。彼は、上述の如く、社會をば、一部分は空間的見地に於いて一部分は交通の可能及び實在によつて外的にも一の全體に結合して居る人間の團體であつて、その個々の成員の間に行はれる內的に基礎づけられて居る相互作用の運載者たるものと見做して居る。ここに外的に結合して居る人間の團體と云ふのは(空間的見地——即ち、一定の地域内に於ける共在——及び交通の可能及び實在と云ふ

制限に就いては、暫く措いて、私たちが先に社會を成す關係に於いて立つと一定の見地から見て認められるところの人間の團體と云つたのに對して、必ずしも撞着しないであらう。併し、內的に基礎づけられて居る相互作用と云ふのは、規制せられて居りその背景に常に或る程度の內的結合、ゲマインシャフト關係の存立を豫想する相互作用と云ふことであり、かくて、フイーアカントは、人間と人間とが夫々人間として相互に及し合ふ作用は凡て根柢に於いては結合的親和的なる作用によつて基礎づけられて居ると云ふ、獨斷或ひは信仰の上に立つて居るのである。彼は、例へば未開人の部落の間に行はれる皆殺しの鬪争等に於いて所謂內的に基礎づけられて居ない關係が存立することを認めては居るが、それをば、人間と人間とが夫々人間として相互に成す關係ではないと云ふ理由を以つて、社會學が考察すべき關係の中に包攝しようとしなない。かくて、彼は、分離的反對的關係を無視して結合的親和的關係のみを注目しこれに於いて認められる強い結合的親和的相互作用——例へば、規制の如き——のみに眩惑せられた結果として、遂に個人と個人との間を結合して居る何らかの實在が個人と個人との間に或ひはその上に存在しその何らかの實在が諸個人と個人を通じてかかる相互作用を行ふが如くに考へるに至つたものであらう。而

して、個人との間に存在する關係そのものが、實體化せられて社會と名けられ、諸成員の間に交換せられる作用の運載者とせられるに至つたものであらう。

1. フォン・ウィーゼは、この點に關して、次のやうに批評して居る。「實際に於いて、人間は、集團性(Kollektivität)に於いて生活し且つ活動する」(Gesellschaftslehre, S. 421)と云ふ語は、モットーとして本書の扉頁に掲げ得るものであつて、個人の心意が團體に依存することを絶えず示して居ることは、彼の大なる功績である。併し、そのことによつては、社會的事象の一のそれ自身としては拒まない方面が心理學的に把握せられるのみに止る。他の命題も、これに劣らず正常なのであつて、それは、フーリアカントの非方法的な模範に倣へば、「實際に於いて、人間は、孤立性(Solitarität)に於いて生活し且つ活動する」として云ひ表されるものである。併し、結合(Vergemeinschaftung)に向ふものと分離(Venezung)に向ふものとの二つの線が如何に奇異に互ひに交叉し且つ斷絶するかを示すことが、まさしく、社會學の課題なのである。フーリアカントは、「社會と共に、また、その中に於ける平衡の状態が與へられる」と云ふ。併し、この平衡は、絶えず危くせられ、すぐ次の瞬間に、新しい平衡状態に向ふ傾向が生ずるのである。」(Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie, 3. Jahrg., Heft 2/3, S. 179)

なほ、彼が社會をば有機的全體と見る所説に關聯して、少しく述べて置きたいことがある。彼は、通俗の思考法が *Persönlichkeit* の統一性をば過當に評價して居ることを指摘し、又、同一の人間が異つた關聯の中に於いて全く正反對の屬性を展開するのを矛盾と認めることは、第二次的な意味に於いてのみ即ち一定の度合の統一性及び完結性を要求しその缺乏をば反規範的或ひは更に病的と解釋する價值判斷の意味に於いてのみ正當であることを、主張して居る。併し、私たちは、逆に、彼が社會の統一性

をば過當に評價して居ることを指摘し、又、彼が根柢に於いてグマインシャフト關係により基礎づけられて居ないところの人間と人間との關係をば社會外的關係として社會學の研究範圍の外に棄て去つて居るのは、人間と人間との關係から一定の度合の統一性及び完結性を要求しその缺乏をば反規範的或ひは更に病的と解釋する價值判斷の意味に於いてのみ正當であることを、主張したのである。<sup>1)</sup>

Ⅰ 何を統一體と認むべきか、は、考察の見地により認識の目的により異なるべきである。ブレンナーは、先に擧げた論文の中に、次のやうに云つて居る。『統一體の概念は、個々の個人にも、個人の多數にも、同様に適用し得る。それは、また、個人の多數を考察する場合の個々の個人にも、適用し得る。何となれば、多數は、統一體の總和に外ならないからである。しかし、我らは、また、統一體の概念をば單に多數そのもののみ適用し、この多數を形成する個々の部分には適用しないことも、できる。その場合には、多數は、自然、部分の總和とは異なるものである。かくて、多數が個人の總和とは異なるものか否か、と云ふことは、全く、ただ、我らの考察の様式に依存する。統一體の概念を多數に適用するか、または多數の部分に適用するか、と云ふことは、我らの隨意であるが故に、我らは、多數に於いて、部分の單なる總和よりも以上を見ることも、單に部分の總和のみを見ることもできる。もし、我らが一ダースと云ふ統一體の概念を適用するならば、一ダースの卵は、十二の卵よりは以上のものであらう。併し、もし、我らが一の卵と云ふ統一體の概念を十二の卵に適用するならば、一ダースの卵は、十二の個々の卵と異なるところがないのである。統一體の概念の適用の可能性には、少なくとも我らがここに考察して居る範域に於いては、何らの限界も定められて居ない。それは、個々の個人にも、一人二人三人四人等の個人にも、また、全人類にも、同様に適用せられる。それ故に、我らは、この概念が適用せられることに於いて、多數をば多數を形成する部分の總和から區別する何らの特徴をも認めることができない。』

思ふに、社會的現象を考察するに當つては、豫めその單位を明瞭に決定して置くことが必要である。社會的現象は、個人と個人との間に行はれる一定の作用を本質とする現象である。かかる社會的現象を考察するに當つては、先づ、各個人が他の個人或ひは諸個人或ひは社會或ひは諸社會から一定の作用を及されることによつて展開する作用、及び、各個人が社會的構成物 (socials objects) (社會的相互作用の結果として既に生起し存立して居る諸種の構成物、例へば、諸種の慣習、法律、道德、宗教等) から一定の作用を及されることによつて展開する作用——これら兩種の作用は、夫々、他の個人或ひは社會に對して及されるものと諸種の構成物に對して及されるものを含む——をば、かかる作用を及され且つ及すところの各個人に即して考察する立場が、存立し得る。蓋し、社會學は、諸個人の間に行はれる相互作用或ひは諸個人の間で成立する關係を當面の對象とする科學ではあるが、社會的相互作用或ひは社會的關係の幾何學或ひは論理學ではなくその現象或ひは過程の學であるが故に、この相互作用或ひは關係を理解しようとするに當つては、諸個人が互ひに及し合ふ影響或ひは互ひに執り合ふ態度を中心として考察しなければならぬからである。併し、私たちは、更に、社會的現象が或る場合には社會を單位として考察せられることが可能であ



り必要であることを認めなければならぬ。即ち、社會的現象は、或る場合には、會社協會家族國家其他の各社會が他の個人或ひは諸個人或ひは社會或ひは諸社會から一定の作用を及されることによつて展開する作用、及び、各社會が社會的構成物から一定の作用を及されることによつて展開する作用——これら兩種の作用も、夫々、他の個人或ひは社會に對して及されるものと諸種の構成物に對して及されるものを含む——をば、かかる作用を及され且つ及すところの各社會に即して考察する立場が、存立し得且つ存立しなければならぬのである。尤も、私たちは、各社會をば一の有機體として或ひは一の意識として認めるものではない。社會が感覺中樞を持たぬことは、スペンサーすら認めて居るところである。<sup>1)</sup>従つて、社會が他から影響せられることによつて展開する作用と云へども、結局は、その社會を構成して居る諸個人が當該の影響を受けることによつて展開する作用に外ならない。併し、社會が社會として展開する作用は、多くの場合に於いては、その社會を構成して居る諸個人が直接に展開するものではなく所謂機關 (Organ) たる個人を通じて或ひは社會的構成物を通じて間接に展開するものなるが故に、それを諸個人の作用に分析することは、私たちの認識能力を以つてしては不可能であり、私たちの認識目的にとつては不必要で

ある。これは、一人の人間が營む各種の有機的活動が實際に於いては、無数の細胞が營む活動の合成結果であるにしても、或る場合には、かかる無数の細胞の活動に分析せられずに一箇の有機體の活動として研究せられることが可能であり必要であるのと、同じことである。フイーアカントは、先に指摘して置いたやうに、最初から諸個人の間に行はれる相互作用の中で單に諸本能をばそれらの本質的には固定せられて居る形式に於いて働かしめる刺戟をば除外し、歴史的發展の意味に於ける進化及び變化を生ずる影響のみを考察しようとして居るが故に、彼が個人を單位として行はれる社會的現象の考察に對してよりは社會を單位として行はれるそれに一層多くの興味を感じて居ることは、自然である。併し、社會が社會として行ふ作用がその社會の成員たる諸個人の作用の合成結果であること従つて理論としてはかかる諸個人の作用に分析せられ得ることを否認する彼の態度は、非科學的の誹を免れぬであらう。<sup>2)</sup>

1 Spencer, The Principles of Sociology, Vol. I, 1876, § 222.

2 この點に關するクラカウアーの見解は、ひそしく現象學的方法の社會學に對する重要を説いて居ながらも、フイーアカントよりは遙かに合理的である。社會學の資料領域は、集團的存在及びその相互の關係のみに目標を置くか、又は、種々雑多な社會的結合に於ける個人の規律的動作のみに注意を向けるか、又は、社會學の他の部分(例へば、法律學又は經濟學の基礎たる社會學

的實在範域)をこの科學の本來の對象とする、學者によつて、呑意的に狹められて居る。ジンメルも、社會學の權利を主張するために、社會化によつて惹起せられる個人の心意變化の研究を偏局的に強調し過ぎるこゝによつて、社會學を縮小して居る、ミ思ふ』(Kracauer, op. cit., S. 34 f.)『個人を並んで、團體も、最後の範疇的統一體 (letzte kategoriale Einheit)を以て、社會學の實在範域に入り来る。これは、社會學的に研究せられる爲方に於いて自らを構成し分裂し互ひに結合し衝突するこゝの集團的存在であり、第二次的個體 (Individualitäten zweiter Ordnung)である。その各々は、特異の意味を記述せられ得る相姿を有し、これらの團體の構造の多様性及びそれらと關聯する規律性・本質法則性等を闡明することは、社會學の課題である。この場合には、團體の内部に於ける個人の動作を究明することが問題となるのではなく、全體としての團體そのもの・その性質・運動等即ち純然たる超個人的實在が問題となるのである。尤も、これを理解するためには、屢々、個人に於いて生起する意識事象に溯ることが必要ではあるが、社會學のかかる問題と云ふのは、例へば、民族・ゲマインシャフト・國家・教會・宗派・政黨等であり、詳しく云へば、これら團體の相互的關係・その内面的分裂及び變動・その種々雜多な状態及び時期に於ける本質特徴等である』(ibid., S. 37 f.)

かくて、社會の同一性の問題に就いても、私たちは、フーアカントとは所見を異にせざるを得ない。彼は、社會をば河に譬へ、河の特性はその個々の要素には存せずし、その形成關係及び運動關係に存するが故に、水粒は流れ來つて流れ去るが、その河は持續すると云つて居る。併し、河は、私たちにどつては、オツペンハイマーにどつてと同様に、河岸や河床ではなく、河水の流れである<sup>1)</sup>。而して、社會は、私たちに於いては、ジンメル並びにフオン・ウイーゼに於いてと同様に、物の名詞ではなくして働きの名

詞である。<sup>2)</sup> かくて、私たちにとつては、或る社會がどれだけの期間に亙つて同一の社會を認めらるべきか而して何時他の新しい社會がこれに代ると認めらるべきかは、殆ど、無用の問題である。私たちに於いては、寧ろ、或る社會がその社會の成員によつて、又、その社會の成員でない個人或ひは他の社會によつて、どれだけの期間に亙つて同一の社會を認められるか、而して何時他の新しい社會がこれに代ると認められるか、而して、それは如何にしてか、が、問題となつて來るのである。<sup>3)</sup>

1 Oppenheimer, op. cit., S. 116.

2 Simmel, Grundrissen der Soziologie, S. 10. von Wieso, Allgemeine Soziologie, Teil I, S. 211.

3 ここに、私たちは、この問題を詳論する餘裕を持たないが、要するに、一定の社會的構成物或ひは『社會意識』(例へば、國家に於いては、憲法に規定せられて居る基本的制度或ひは組織——これは、社會學的に考察せられる場合には、究極に於いては、國民の多数或ひはその中の有力者の意識に於いて妥當して居る一定の觀念・感情等に歸する)が存続して居るを成員によつて或ひは非成員によつて認められる限り(極端なる場合に於いては、それが實際には存続して居なくとも)、その社會は、その成員にまつて或ひはその非成員にまつて同一なる社會なのである。フイーアカントが『一の社會は、その中に於いて支配して居る精神が本質的に同様に持續して居る間は、存続して居りそれ自身に於いて同一であるを解せられなければならない』と云つて居るのは、右の事實を云つて居るものと思ふ。ただ、私たちは、『社會の中に支配して居る精神』即ち多くの社會學者に於ける『社會意識』に關して、フイーアカントとは所見を異にするものである。何れにせよ、社會概念と『社會意識』概念とが密接に關係して居ることば、右によつても察知せられるであらう。

私たちは、フイーアカントの社會學概念を考察しようとして、彼の社會學が社會の學であるために、被の社會概念を吟味するに至つたのであつた。この吟味を完全ならしめるためには、社會及び『社會意識』に關する私たちの見解を少しく積極的に論述する必要があることを感ずるけれども、それは、暫く、別の機會に譲りたい。

## 六

要するに、フイーアカントの社會學は、社會の學即ちその諸要素が特質的關係を成す一全體の學であり、それ故に、かかる全體たる社會がその構成要素たる諸個人の間を生起せしめる相互作用及び諸個人の間存立せしめる相互關係をも研究するものなのであるが、私たちの社會學は、社會的現象の本質の學即ち諸個人の間に行はれる相互作用従つて諸個人の間に認められる相互關係の學であり、それ故に、社會即ちかかる諸個人の結合状態をも研究するものなのである。かくて、社會學概念及び社會概念に關聯してフイーアカントの立場と私たちのそれとの間に存在する距離は、考察を進めるに従つてますます遠くなるばかりである。併し、私たちは、不完全ながらも、私たちが最初に目的として掲げたことをば略々爲し遂げたと思ふが故に、こ

に、この蕪雜な小論を一應終ることとする。

私たちがこの考察によつて、私たちの將來の社會學上の研究に於いて注意しなければならぬ事實として特に強く意識せしめられたのは、(一)社會の哲學的研究とその科學的研究、(二)社會的現象をば自然的現象と見做して研究する社會學とそれをば文化的現象と見做して研究する社會學、(三)社會的現象の本質を對象とする純正社會學とこの純正社會學の認識を中心として社會的現象の具體的様相を把捉しようとする綜合社會學、(四)社會的現象をば個人を單位として考察する社會學の部門とそれをば社會を單位として考察する社會學の部門、これらの各々が、共に充分なる權能を以つて樹立せらるべきであり、且つ、これらの各々は、相互に明確に區別せられなければならぬ、と云ふことである。(一九二五年八月一九日)